



わたしの聖戦^{ジハド}

女性が働くこと

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

(126)

「科学」はなんてつまらない

先般、猫に関する研究が某大学でおこなわれたとのニュースを見た。

それによると、犬に比べると愛想がないと思われる猫が、実は飼い主の声を聞き分けられることが実験によつてわかつたというものの。

20匹の猫を対象に、他人と飼い主それが呼びかけたところ、15匹が

飼い主の声のみに反応し

た。それを受けて「一般的に信じられてきたツレない猫の生態を科学的に証明できた」と研究者がコメントしていたのだ。

私はびっくりするやら

あきれるやら……。

その理由1、そんなこ

と猫を飼っている人なら

皆わかっているでしょう。

猫の性格は様々だから皆がそうだとは断定できないものの、呼び声どころか飼い主と猫の関係はもつと密接で濃い。わざわざ研究費を使って証明することに何の意味があるのかさっぱりわからない。



てつまらないの、と少々辛口の思いである。

仮に、知性イコール脳だと仮定して、知能を表す（これも本当かどうかはつきりしない）といわれる「脳化指数」でみるとヒトは0・86、猫は0・12である。当然数字が高いほど知能も高

か。

現代社会が科学の恩恵を受けて成り立っていることは確かだ。科学の進歩によつて夢だと思われたことが実現したり、病気が多少改善したり、実も枚挙にいとまがない。育たないはずの子どもが成長したり、未知だつた宇宙の実態がほんの少しづかづたり……しかし、

科学がすべてに勝つことはいえないのかもまた真実。不可能が可能になつたからといってそれがイコールヒトの幸せを意味するものでもない。

この世のあらゆる事象は「体的であり、経験的に実証可能な知識」とあり、科学的とは「考え方や行動のしかたが、論理的、実証的で、系統立てているさま」と説明されている。ひらく言えば、だれがやつても同じ結果が導き出されるもの、

ともどれ。この世のあらゆる事象を「なぜ」「どうして」と思い、それを解説しようとするとときに「科学」は必要だし、人々的好奇心の源もある。しかし、すべてを科学で説明する必要は毛頭ない。逆に、

作家の佐藤愛子さんは「幸福とは何ぞや」の中で、「もうこのへんで科学の進歩は止めるべき」と断言している。そうしなければ肉体も精神の強靭さもどんどん失われていくと。本当にそのとおり、なんでも「そこそこ」でとどめておくのが一番だ。

…といつてもそれが実のところ最も難しいことを、嫌というほど知つてゐるのもまた我々ヒトなものだけれど。

いとみなす。ちなみに犬は0・14で、ヒトの次はイルカである。この種の数値はヒトがトップに来るのが常であり、ゆえに他の動物を下等に位置づけ、それぞれの生態を調べ、あれこれ理屈をつける態度は、おこがましいのではないだろう

ような発言。こんな程度の研究を「科学的」と言ふことこそが金科玉条のあたり、科学つてなん

いとみだらう。

イラスト・伊藤栄章